

う す き たけし

白杵 岳

共通教育推進機構 准教授
文学修士／福岡大学

ホームページ URL

なし

主な研究業績

- 白杵岳 (2016) 「動詞の意味の核と周辺: 様態・結果の相補性の観点から」『日本英文学会第 88 回大会 Proceedings』,99-100.
- 白杵岳 (2015) 「様態・結果の相補性仮説に関する一考察」『語彙意味論の新たな可能性を探って』, 由本陽子・小野尚之 (編) 開拓社, 274-299
- Akita, K. and T. Usuki (2015) A constructional account of the 'optional' quotative marking on Japanese mimetics, *Journal of Linguistics (online First View)*, 1-31
- Usuki, T. and K. Akita (2015) What's in a mimetic?: On the dynamicity of its iconic stem, *Iconicity: East Meets West (Iconicity in Language and Literature)*, 109-123.
- Usuki, T. and K. Akita (2013) Fiction in an Encyclopedia: A Generative Lexicon Approach to Fictive Mimetic Resultatives in Japanese, 『言語学からの眺望 2013』, 308-321.
- 白杵岳 (2013) 「動詞の項構造拡張に関する一考察」『福岡大学研究部論集 A : 人文科学編』, Vol.12 No.7, 79-88
- Usuki, T. (2012) When Talmy's Typology Meets Peculiar Mimetics in Japanese, *JELS* 29, 351-357.
- 白杵岳 (2011) 「ばなし」構文: 語形成と意味のミスマッチ」, *Proceedings of the Thirty-Fifth Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society*, 180-191.

キーワード

形態論, 統語論

研究テーマ Research theme

統語と意味のインターフェイス

概要 Overview

本研究の核となる学術的な問いは、「人はなぜ言語を使えるのであろうか?なぜ、短期間に言語を習得できるのであろうか?」です。本研究では、この問いに対して、Chomsky が提唱する生成文法理論に基づく仮説を検証しています。つまり、人間は生まれ持って言語を習得できる Language Faculty をもち、言語を習得するという仮説です。そして、言語間の差異は、様々なインターフェイスやパラメーターセッティングによるものであると考えられています。

本研究では、この生成文法理論に基づき、大きく三つの研究を進めています。第一に、日英語の動詞の項構造の拡張現象と統語的具現化に理論的説明を与えることです。この研究を進めるうえで、まず日英語における結果構文、移動構文、壁塗り構文などにおける項構造の差異に関して、理論的説明を与えることを探求しています。また、Levin and Rappaport Hovav (2013)、Beavers and Koontz-Garboden (2012)、白杵 (2016) などの様態・結果の相補性仮説についても検証を進めています。第二に、日英語の動詞の項構造の統語的具現化の差異に関して言語類型論的な見地から妥当な説明を与えることを明らかにする試みです。これに関しては、Talmy (2000) の先行研究を参考に、理論言語学的説明を与える方向性を考えています。

最後に、日本語の複合動詞の派生とオノマトペ動詞の派生を考察することで、新たな言語事実から理論言語学への新たな知見を提供できるのではないかと考えています (Akita 2009, 影山 1993, 2005)。これまでの生成文法理論の多くは、英語を中心に反証されてきたものでもあるので、日本語を中心とした研究からの反証は今後の理論言語学発展のためにも大きな役割を果たすと考えています。